

哲学対話における「問い」の共有

——「問いの当事者性」と「問いの共同性」に注目して

Sharing a question in philosophical practice: focused on “nature of person concerned”
that questions have and “community” that questions have

青木 門斗（東京大学大学院教育学研究科）

【要旨】

本論文は、哲学対話において「問い」の共有がどのような意義をもつかを検討する。「問い」は、人が他者や事物、出来事に対して固有に抱く印象から生じる。「問い」を提起する者だけでなく、他の参加者も「問い」に固有の印象を抱くため、「問い」のイメージには差異がある。他方、「問い」は言葉で表現されることで、大まかな意味を参加者に共有する。この大まかな意味が媒介となり、「問い」を提示する人が固有にもつ「問いの当事者性」が、他の参加者の「当事者性」を触発する。

This paper aims to explore the significance of sharing a question in philosophical practice. Questions arise from the unique impressions which others, things, and occurrences make on people. Not only one who propose the question, but only other participants have the unique impression about the questions, leading to differences in image of the questions. On the other hand, questions share general meaning because questions are expressed through language. This general meaning serves as an intermediary, by which the “nature of person concerned to the question” uniquely held by the questioner inspires the “nature of person concerned” in other participants.

【キーワード】

問い、問いの共有、当事者性、経験の固有性、和辻哲郎、共同性、意味の共有、当事者性の触発、媒介

Question, sharing of a question, questioner, person who are questioned, nature of person concerned, uniqueness of experience, Tetsuro Watsuji, community, sharing of meanings, inspiration of nature of person concerned, intermediary

1 序論

哲学カフェや子どもの哲学（P4C）といった哲学プラクティス（哲学を実践すること）を総称して、日本では「哲学対話」という語が用いられている⁽¹⁾。現在日本では、欧米の哲学プラクティス（哲学カフェ、子どもの哲学、ソクラテック・ダイアログ）を由来としながら、教育現場や地域のイベント、企業の中など様々な場で哲学対話が実践されている。そうした実践においては、寺田が指摘するように、「目的や方法は実践者によってさまざまであり、それに応じて哲学対話のあり方もさまざま」⁽²⁾である。

そのように様々なあり方で実践されている哲学対話に、共通している基本的な要素があるとすれば何だろうか。それはおそらく、最初に「問い」を設定し、その「問い」を参加者に共有することを対話の出発点とすることである。実際、寺田は「さまざまな形の哲学対話の間にゆるやかに共通してみられるいくつかの特徴」⁽³⁾の1つ目として、「問いがある」ことを挙げている。また、馬場も、「哲学対話を他の様々なコミュニケーションから区別する大きな特徴の1つは、共有された『問い』を中心に対話がなされる点である」と述べている⁽⁴⁾。確かに、参加者やファシリテーターの発話が繰り返されるなかで、話題が「問い」から逸れて参加者が「問い」を忘却するような哲学対話も存在する。しかし、参加者やファシリテーターの思考と発話を生み出した最初のきっかけは「問い」である。その意味で、「問い」が哲学対話の出発点であることは、ほとんどすべての哲学対話に共通すると言えるだろう。本論文では、「問い」を哲学対話にとって不可欠な要素と見なし、逆に「問い」を起点とする全ての対話実践を哲学対話として想定する。

哲学対話における「問い」に関しては、馬場も指摘しているように、様々な哲学対話の入門書で「問い」を出す具体的な方法が説明されてきた。また、学校教育現場での哲学対話の実践において「問い」を出す過程も、現場の実践に基づいた研究で描かれている⁽⁵⁾。他方で、それらは「問い」を出す方法や過程を説明するものであり、哲学対話が「問い」から始まることの意義は問い直されていない。哲学対話における「問い」はどのような性質をもつもので、哲学対話においてどのような役割を果たしているのだろうか⁽⁶⁾。

哲学対話における「問い」自体を主題的に扱った研究としては、「問い」を出す作業の難しさを問題として設定した馬場（2022）が挙げられる。そこでは、「問い」を挙げる難しさの背景が探られると同時に、哲学対話にとって重要なのは、「問い」が哲学的であることではなく、「問い」が「問い」を出す人にとって自分ごとであることだと示された。

しかし、哲学対話における「問い」の役割を検討するためには、「問い」を出す人に注目するだけでは不十分である。そのため、本論文では、「問い」が哲学対話の参加者に共有される過程にも着目する。哲学対話において提示される「問い」が自分ごとであるのならば、「問い」を提示した人と、それを提示していない他の参加者の関係は非対称なものになるのではないか。すなわち、「問い」を出した人だけが自分ごととして対話に臨み、「問い」を出していない人は自分ごとと感ぜないままで対話に参加することになるのではないか。しかし、馬場（2022）が、「哲学対話の場で問いを共有する場合、その問いは全員にとっての問いになる」と言うように、多くの哲学対話では、「問い」を出した人とそうでない人の差はすぐに消えてしまう。自分ごとであったはずの「問い」が参加者全員にとっての「問い」となるのは、「問い」がどのように共有されるからであろうか。

本論文では、以下のような順で、哲学対話の「問い」がもつ性質を探り、「問い」の「共

有」について明らかにすることを試みる。まず第2節では、「問い」を挙げる場面について検討する。一個人が「問い」を出す際、その「問い」が何に由来するものかを確認し、「問い」が当事者性をもつということの意味を提示する。次に第3節では、挙げられた「問い」が参加者に共有される場面について検討する。「問い」のもう一つの性質である「問いの共同性」の構造と、哲学対話における「問われる者」の在り方を確認した後で、哲学対話における「問い」の共有がどのような意義をもつかを明らかにする。最後に第4節の結論にて以上の議論を取りまとめ、今後の研究に向けた課題を提示する。

2 「問いの当事者性」

2-1 「問い」は何に由来するか

本項ではまず、「問い」を挙げる場面について考える。哲学対話において、「問い」は主に以下の2つの方法のいずれかで挙げられ、1つの「問い」に決められることが多い。ひとつは、対話の主催者やファシリテーターが予め「問い」を設定している場合である。もうひとつは、参加者がそれぞれ「問い」を考えて提案し、多数決などによって絞る場合である。いずれの場合においても、「問い」は対話の主催者ないし参加者というひとりの人が考えて提示するものである。それでは、そもそもひとりの人がなにか「問い」を挙げるとき、すなわちなにかを「問う」とき、その「問い」は何に由来するものだろうか⁽⁷⁾。

哲学対話の実践にも取り組んでいる梶谷は、「問うこと」の意味として「好奇心の表れ」と「違和感の表れ」の2つを挙げている⁽⁸⁾。好奇心とは、なにかを知りたい、理解したいと思う気持ちである。梶谷によれば、好奇心には「知的好奇心」すなわち「特定のテーマについていろんなことを知ろうとする欲求」と「対人的好奇心」すなわち「さまざまな他者との関係において、相手のことを知りたいと思う気持ち」の2種類がある⁽⁹⁾。例えば、「知的好奇心」に主として由来する問いとしては、「人間と動物は何が違うのか」「命とは何か」⁽¹⁰⁾のような問いを挙げることができる⁽¹¹⁾。また、「対人的好奇心」に主に由来する問いとしては「どんなときに幸せを感じるか」「どんな人と仲良くなりたいか」のような問いを挙げることができる。

好奇心が「問い」を生み出す一方で、「問うこと」は、必ずしも物事や人に対して知りたいという欲求のみに基づくものではない。むしろ、「問うことは、たんなる疑問ではなく、怒り、反発、抗議、苦悩、不安などの感情を帯びていることも多い」⁽¹²⁾と梶谷は言う。そうした「怒り、反発、抗議、苦悩、不安などの感情」をわれわれが感じるのは、「自分と世界の間には必ずズレがある」⁽¹³⁾からであり、そのズレを梶谷は「違和感」とまとめて表現している。例えば、「勉強したくない」という不満や反発は、「なぜ勉強する必要があるのか」という問いを生み出しうる。また、勉強が苦手であることを不安に感じた人が、「生きるために何が必要か」という問いを挙げることもあるだろう。

「問い」の起源としては、好奇心と違和感のほかに「驚き」を挙げることができる。同じく哲学対話の実践にも取り組んでいる河野は、「驚きが当惑や混乱を伴うことは明らかだが、であれば、驚きは思考の始まりになる」⁽¹⁴⁾と述べている。「驚き」が「思考の始まりになる」ということは、「驚き」が「問い」を生み出し、その「問い」が思考を駆動すると考えることができる。例えば、「どうして自然を美しく感じるのか」という問いは、自然の美しさに対する驚きから生み出された「問い」だと見なすことができる。

他方で、馬場は、哲学的な問いの起源を「驚き」のみに限定することを批判し、ヤスパーズの哲学観に基づきながら、「懷疑」や「限界状況における苦悩」も哲学的な問いの起源になりうることを指摘している⁽¹⁵⁾。それゆえ、特にこどもとの哲学対話で重視されやすい「こどもが本来もっている驚きのちから」だけでなく、「社会に適応しつつある『若者』の社会への疑念」や「社会にすでに適応した『大人』の苦悩」もまた哲学対話における「問い」の由来となりうる⁽¹⁶⁾。馬場は、こうした問いのなかでも社会に関する疑問や苦しみに関する例として、「制服や校則はなぜあるのか」「苦悩を引き起こすような働き方がなぜますます増えているのか」といった「問い」を挙げている⁽¹⁷⁾。なお、馬場の提示する「懷疑」「苦悩」「疑念」といった要素は、梶谷の提示する「違和感」（怒り、反発、抗議、苦悩、不安など）と重ね合わせることができるだろう。

以上のような既存の議論を踏まえると、哲学対話において挙げられる「問い」は、驚き、好奇心および違和感といった要素を由来としていえると考えられる。なお、現実的には、どれか一つの要素からのみ「問い」が生まれるのではなく、驚きや好奇心、違和感がそれぞれ交じり合いながら「問い」が生じると考えるのが適当であろう。

2-2 「問い」の当事者性

前項では、問いを生み出す要素として、驚き、好奇心、および違和感を挙げた。これらは基本的にいずれも、「問い」を出す人が、何らかの他者や事物あるいは出来事に直面する際に抱く印象である。しかし、人々は同じ他者や事物ないし出来事に対して、同じように驚いたり、同じように好奇心や違和感をもったりするわけではない。人々が他者や事物、出来事などに対して抱く印象は、その人の考え方やそれまでの経験の影響も受けるため、個々に異なる⁽¹⁸⁾。言い換えれば、他者や事物、出来事などは、それを経験する人において固有の印象をもって経験される。それゆえ、驚きも好奇心も違和感も、「問い」を出す人と、その人が出会う他者や事物、出来事との関係のなかで固有の仕方で抱かれる。例えば、制服や校則のある学校生活を同様に送っていたとしても、その生活に反発を覚える人もいれば、不安を感じる人もいるだろう。中には、制服の着方について好奇心を抱く人もいるかもしれない。また、制服や校則の存在に対して同様に不安を感じる場合であっても、不安の背景や感じ方は人によって異なる。

馬場は、「問い」を生み出す「驚き、懷疑、苦悩が本人に由来していること」を「問いの当事者性」と呼んでいる⁽¹⁹⁾。「本人に由来している」とは、前述のような、他人や事物や出来事が経験される際の固有の印象に由来するということとして理解できる。そして「問い」は経験の固有性を源泉として浮かびあがる。そのように考えるとき、「問いの当事者性」は「驚き、懷疑、苦悩」だけでなく、好奇心についても同様に言える。人は、他者や事物、出来事に対してそれぞれ異なった仕方で驚きや好奇心、違和感を抱く。本論文では、その固有の印象を源泉として生じるといえる「問い」の性質を「問いの当事者性」と呼ぶ。例えば、校則に対する違和感から「なぜ校則に従わないといけないのか」という問いが生じるとき、その問いは「問いの当事者性」を有している。

なお、ここでの「当事者性」の使い方は、既存の「当事者性」概念とも接続可能なものである。例えば福祉教育の文脈では、「当事者性」が障害などの特別な問題的事象に対して用いられ、問題的事象の学習者の「当事者性」が焦点になる。その場合には、「当事者性」

は「『当事者』またはその問題的事象と学習者との距離感を示す相対的な尺度」として捉えられることがある⁽²⁰⁾。他方、本論文における「当事者性」は、特定の問題的事象に限定せず、人を取り巻く全ての他人・事物・出来事に対して用いている点で、福祉教育における「当事者性」概念との差異がある。しかし、「事象との距離感」として「当事者性」を捉える福祉教育の考え方は本論文における立場とも食い違わない。本論文で提示した「当事者性」もまた、人を取り巻く他人・事物・出来事とその人自身との距離感として考えられるからだ。その点では、本論文における「当事者性」概念は、狭義の「当事者性」概念を、問題的事象に限定されないように拡大的に解釈したものとして理解できる。

3 哲学対話における「問いの共同性」

3-1 和辻における「問いの共同性」

続いて本節では、「問い」が対話の参加者に共有される場面について考える。「問い」は、それを提示する個人の固有の印象に由来するものであるが、同時に「問い」が他の参加者とのあいだで「共有」されることによって初めて対話は可能になる。このとき、「問い」を提示する人と「問い」を受け取る参加者はどのような関係にあり、「問い」はどのような役割を果たしているのだろうか。以上の問題を検討するために、本項では、「問い」が他者と共有される性質をもつことを論じた和辻の議論を参照したい。

和辻は、『人間の学としての倫理学』において「倫理とは何であるか」を問うなかで、「問い」が共同性をもつことを指摘した。まず和辻は、ハイデガーが『存在と時間』で「問い」の構造について述べていることを議論の出発点とする。ハイデガーによれば、「問い」は「問われているもの」「問われていること」「問う者」という3つの要素をもつ⁽²¹⁾。第一に、「問い」は何かへとむけられたものであるから、「問われているもの」をもつ。第二に、「問い」は「問われているもの」が何かであることを求めているから、「問われていること」をもつ。そして第三に、「問うこと」は、誰かのはたらきであるから「問う者」をもつ。

こうしたハイデガーの提示する問いの構造に、和辻は「問われる者」という要素を付け加えた。なぜなら、「その問いは何者かに対して向けられている」からである⁽²²⁾。「問い」は、それが言葉や身ぶり手ぶりで表現されうるものである限り、一人だけで成立するものではなく、それを受け取る人を必要とする。このとき、「問う者が問うとともに、その問いは問われる者にとっても存在する」⁽²³⁾。和辻はこれを「共同的性格」と呼び、「問われる者」と「問う者」とのあいだには「問い答えるという関係」が成立すると述べた。ここで注目すべきは、「共同的性格」が言葉や表現によって支えられていることだ。人間は、心の内に言語化されない漠然とした疑問を抱くことがある。しかし、和辻によれば、それは「いまだ問いではない」⁽²⁴⁾。漠然とした疑問——それは前節で確認した「問いの当事者性」と重なる——が「問い」となるのは、言葉や記号で表現されることによってである⁽²⁵⁾。ここでは、言葉や記号に支えられて、「問い」の「大まかな意味」が「問う者」と「問われる者」の双方に共有される。本論文では、「問い」が、「問う者」だけでなく「問われる者」にも共有されるような大まかな意味を有するという性質を「問いの共同性」と呼ぶ。この「問いの共同性」を支えているのが、「問い」を表現している言葉や記号である。

3-2 「問われる者」とはどのような存在か

「問い」が「問う者」と「問われる者」をもつという構造は、哲学対話にも当てはまる。前章で検討したような「問いの当事者性」をもって「問い」を提示する人が「問う者」であり、それを受け取るその他の参加者が「問われる者」である。しかし、和辻の議論における「問う者」と「問われる者」の関係を哲学対話に適用する際には、それが「問い答える関係」とされていたことに注意すべきである。和辻の議論で想定される「問われる者」とは「答える者」のことであった。一方、哲学対話で「問い」を受け取る参加者たちを、「問い」に「答える」者と見なすことには慎重になる必要がある。その理由は2つある。第一に、馬場（2022）が指摘しているように、哲学対話が「問う者」と「答える者」の関係で成り立つときには「悩める人がアドバイスを求める悩み相談のような雰囲気」に陥ることがあるが、それは哲学対話としては不適切だと考えられているからだ⁽²⁶⁾。第二に、岩内・小川（2022）が指摘しているように、哲学対話における「答え」の評価は多様であり、「哲学対話における問いと答えの関係の理解をめぐっては、実践者によって立場の違いがあるのが現状である」からだ⁽²⁷⁾。それでは、哲学対話において、「問われる者」である参加者とはどのような存在であろうか。

岩内・小川（2022）によれば、哲学対話のうち、いくつかの手法では「答え」が重視されている。例えば、「ソクラテック・ダイアログ」というドイツ由来の哲学対話は「『問い』に対するグループとして合意できる『答え』を導こうとする」⁽²⁸⁾。また、「現象学的哲学対話」と称される方法でも、更なる対話によって「答え」が変わる可能性は認められつつも、「誰もが納得しうる答えを導きだそうとするコンセンサスが対話の場の基調になっている」という⁽²⁹⁾。

その一方で、アメリカで創始された「子どもの哲学」と呼ばれる方法においては、「答え」はあまり重視されていない。「実際の対話の際に重視されるのは、必ずしも問いに対する明確な答えではなく、むしろ問うことそれ自体である」という⁽³⁰⁾。すなわち、哲学対話の場において「問われる者」に求められるのは、「問い」に端的に答えることではなく、「提起されたその問い自体を問うていくこと」である⁽³¹⁾。この「問い自体を問う」という過程について、そうする必要が生じる理由を、村瀬・土屋（2019）は以下のように説明している⁽³²⁾。

問いが一つに決まっても、その解釈は多様である。問いの提出者がその意味を十全に理解していないだけでなく、提出者の意図とは違った、それを越えた解釈を参加者がする可能性がある。適切に探求を行うには哲学的探求の共同体内で問い自体を問い、意味を共有しながら探求をすすめる必要がある。

この内容を、村瀬・土屋（2018）は教育方法上の理由として提起しているが、1つの「問い」に対する解釈が多様であることは、教育方法としての哲学対話に限られるものではない。あらゆる哲学対話において、最初に「問う者」によって提示された「問い」の印象・イメージは、それを受け取った参加者それぞれによって異なる。なぜなら、「問い」に使用されている語句がそれを受け取る人に与える印象は、その人の知識や経験に応じて異なっているからだ。例えば、「制服や校則はなぜあるのか？」という「問い」では、想定する学

校種や「校則」として想起する内容に、参加者それぞれで差異が生じる。この「問い」が与えるイメージは、その「問い」を受け取る人の学校経験や価値観に左右されるものである。また、語句が与える印象が異なれば、「問い」によって喚起される思考も参加者によって大きく異なる。実際、最初に提示された「問い」で用いられている言葉のイメージや、「問い」から想定する場面が参加者によって全く異なっていたことは、しばしば対話の過程で明らかになる。

したがって、「問う者」によって提示された「問い」は、その「問う者」の手を離れ、「問われる者」それぞれによって多様な印象をもって受け取られている。それは、「問い」もまた、参加者が固有の印象をもって経験する対象だからである。ここで、「問いの当事者性」は「問う者」だけでなく、「問われる者」へと拡張される。すなわち「問われる者」は、「問われる者」自身の「問いの当事者性」を伴った仕方で、提示された「問い」を受け取る。このとき、「問われる者」は、提起された問いに「問う者」とは異なったイメージを持っていることになる。それゆえ、同じ「問い」によって「問う者」には喚起されなかった疑問が、「問われる者」において浮かびあがり、「提起されたその問い自体を問う」ことが可能になるのだ。なおこうした「問われる者」の当事者性は、提示された「問い」を参加者が最初に受け取る場面で起こることであるから、「ソクラテック・ダイアログ」や「現象学的哲学対話」といった「答え」を重視する方法においても当てはまる。

以上のように「問われる者」の「問いの当事者性」に注目するとき、哲学対話における「問われる者」とは、和辻が述べたような単なる「答える者」であるのではなく（あるいは「答える者」である以前に）、「提示された問い」をきっかけに自分自身の固有な仕方で問う者である。それゆえ、「問われる者」もまた、「問い」に対して「問いの当事者性」を抱いて自ら問う存在である。

3-3 「問う者」と「問われる者」の関係

前項までの議論では、「問う者」が「問いの当事者性」をもって「問い」を生み出すことと、そうして生み出された「問い」を受け取った「問われる者」もまた、「問いの当事者性」をもって対話のなかで「問う」ことを述べた。これを踏まえて、「問い」が哲学対話の参加者に共有されるということがどういうことか、そのとき「問う者」と「問われる者」の関係はどのようなものとなるかを検討しよう。

哲学対話の参加者は、それぞれが「問いの当事者性」をもって自ら問う存在であった。当事者性は各自が固有に有するものであり、他者と一致するものではない。それゆえ、固有に経験される「問い」のイメージは、参加者の間で完全には共有されえない。したがって、哲学対話における「問い」の共有は、「問いの当事者性」の共有を意味しない。

他方で、「問い」が言葉や記号によって表現されている限り、「問い」は「問いの共同性」を有している。すなわち、「問い」は参加者に共有されるような大まかな意味を持っている。例えば、「校則はなぜあるのか？」という「問い」が採用されたとき、「校則」として想定されるイメージは参加者それぞれによって異なるが、ほとんどの場合、「校則」という言葉がもつ大まかな意味（例えば、「学校における規則」）は共有されている。逆に、言葉や記号によって「問い」の大まかな意味が共有されているからこそ、参加者それぞれが「問い」に抱くイメージの差異が可視化される。このように、哲学対話における「問い」の共有と

は、「問いの当事者性」の共有ではなく、言葉や記号を通じた「問い」の大まかな意味の共有として理解できる。

ところで、「問い」に言葉や記号を与えるのは、「問う者」が驚きや好奇心、違和感に由来する漠然とした疑問を「問い」へと昇華することである。それゆえ「問い」を構成する言葉や記号は、「問う者」のもつ「問いの当事者性」によって生み出されたものである。他方で、「問われる者」のもつ「問いの当事者性」は、「問われる者」が、提示された「問い」を受け取るときに生じるものであった。そこでは、「問い」を構成する言葉や記号が「問われる者」に「問い」の大まかな意味を共有し、その者の「問いの当事者性」を呼び起こす。したがって、「問う者」と「問われる者」の関係は、次のように説明できる。「問う者」の「問いの当事者性」が、言葉・記号で構成された「問い」を媒介として、「問われる者」の「問いの当事者性」を触発する、と。

4 結論・展望

本論文は、哲学対話が「問い」から始まることの意義を探るために、哲学対話の「問い」がもつ性質を検討し、「問い」が共有されるとはどういうことかを明らかにすることを試みるものであった。

「問い」のもつ性質の1つは「問いの当事者性」である。「問い」が生まれる基盤となる驚きや好奇心、違和感は、各個人において固有の仕方で経験されるものである。それに伴って、「問い」も、「問い」を出す人が自分なりの仕方で生み出すものであり、その固有に生み出されるという「問い」の性質を「問いの当事者性」と呼んだ。この「問いの当事者性」は、「問い」を出す人だけでなく、「問い」を受け取る人にも見いだされるものである。すなわち、哲学対話においては、提示された1つの「問い」を参加者それぞれが自分なりの仕方で引き受ける。それゆえ、「問い」が共有されるときに、「問い」のイメージが参加者同士で完全に一致することではなく、「問いの当事者性」は共有されない。

他方で、「問い」には「問いの共同性」という性質もある。それは、「問い」が言葉や記号によって表現されることで、「問い」の大まかな意味が哲学対話の参加者に共有されるという性質である。

以上の「問いの当事者性」と「問いの共同性」の関係は次のように整理できる。第一に、「問いの当事者性」をもつ者が「問い」を挙げるときに、固有の経験が言葉や記号で表現されることで「問いの共同性」が生起する。第二に、「問いの共同性」をもった「問い」に直面することにより、他の参加者の「問いの当事者性」が触発される。したがって、「問いの共同性」は「問いの当事者性」の触発を媒介するはたらきを果たしている。「問い」が共有されるとは、「問いの共同性」を通じて「問い」の大まかな意味が共有され、それによって、「問い」を提示する者以外の参加者において、完全には共有されえない「問いの当事者性」が触発されるということである。

本論文は、「問いの当事者性」という概念を、「問い」を挙げる人から哲学対話の参加者全体に拡大し、「問いの共同性」を媒介として「問いの当事者性」が触発されると論じた点で意義がある。これにより、哲学対話が「問い」から始まることは、参加者全員が「問いの当事者性」を抱いて自ら対話に参加するために重要であることが示される。また、他者の「問い」によって自分自身の「問いの当事者性」が触発されることは、哲学対話におい

ては、それまで自分一人では考えることのなかった「問い」について「問いの当事者性」をもって考えることができるということを示唆している。

ただし、本論文の議論には検討すべき課題がまだ残る。本論文では、「問いの当事者性」と「問いの共同性」の関係を、他者に共有されない「問い」のイメージと他者に共有される「問い」の大まかな意味の存在を指摘することで説明した。しかし、「問い」の「イメージ」と「大まかな意味」をいかに区別できるか、という問題については本論文では論じられていない。ただし、ある「問い」について、何が参加者に共有されていて、何が共有されていないかは、哲学対話の冒頭で「問い」が提示された時点では明らかでない。哲学対話においては、たとえ、一般的には皆に共有されていると思われる内容であっても、問い直される可能性があるため、問いの「大まかな意味」が言葉の一般的な語義であるとも言い難い。問いの「イメージ」と「大まかな意味」の区別は、哲学対話が進むなかで少しずつ明らかになるものである。

それゆえ、哲学対話における「問い」の役割を検討するうえでは、対話が進行していく過程にも注目する必要がある。実際の哲学対話では、最初の「問い」を起点として様々な参加者が新たな疑問を提示したり、他の参加者に質問を提起したりすることがよくある。そうした問いかけを通じて、参加者の「問い」に対する理解の差異が明らかになる過程については、今後の検討課題としたい⁽³³⁾。

【註】

- (1) 寺田 (2020)、p.2. なお、「哲学対話」という語のもとに多様な対話的哲学実践を総合的に捉える動向は国内に特徴的な傾向であると考え。それに伴い、本論文では従来の議論について国内の「哲学対話」に関する議論に絞って参照した。
- (2) 寺田 (2020)、pp.2-3.
- (3) 寺田 (2020)、p.3.
- (4) 馬場 (2022)、p.13.
- (5) 例えば、教育現場における哲学対話やその「問い」について記述している文献としては椋木・柏葉・有吉 (2021) を挙げることができる。
- (6) なお、本論文の議論で想定している対話実践において、実践者ないし参加者がその実践を「哲学対話」と自称・呼称したり認識したりしているかは問題とならない。哲学対話とはそれ自体厳密に定義できるものではないが、それが狭義の「哲学対話」であるかどうかに関わらず、「問い」を始まりとする対話実践全体を本論文では議論の対象としている。
- (7) 哲学対話の主催者が「問い」を事前に設定する際には、哲学対話の外部で主催者および参加者を取り巻く事情が影響することも大いに予想される。例えば、指導要領に沿った「問い」であるかという教育上の事情や、集客しやすい「問い」であるかという企画運営上の事情がありうる。これらの要因は、「問い」が一般的にもつ性質とは無関係であるため、本論文の検討の範囲外とする。
- (8) 梶谷 (2023)、pp.26-32.
- (9) 梶谷 (2023)、p.28.
- (10) 「命とは何か」という問いは、椋木・柏葉・有吉 (2021) で紹介されている「第2回の研究授業」でC班によって最終的に決められた「問い」である。(椋木・柏葉・有吉 (2021)、p.22.)

- (11) ただし、「知的好奇心」に由来する「問い」は知識によって答えを出すことが可能な「問い」になりやすいが、そうした問いは哲学対話の「問い」として相応しくないという考え方もある。
- (12) 梶谷 (2023)、p.30.
- (13) 梶谷 (2023)、p.31、強調は原文通り。
- (14) 河野 (2019)、p.70.
- (15) 馬場 (2022)、pp.15-18.
- (16) 馬場 (2022)、p.18.
- (17) 馬場 (2022)、p.19.
- (18) 現象学では、「意味」という概念を用いてこうした事態が説明される。『『意味』ないし方向性は、同じ物事や出来事であっても、個々人によって、たとえばその人が何を大事にし、どのようにそれまで生きてきたか等に応じて、さまざまに異なって経験されうるという側面をもつ』（榊原・本郷 (2023)、p.12.)
- (19) 馬場 (2022)、p.18.
- (20) 松岡 (2006)、p.18.
- (21) ハイデッガー (1994)、pp.33-34.
- (22) 和辻 (1934)、p.184.
- (23) 和辻 (1934)、p.183.
- (24) 和辻 (1934)、p.184.
- (25) 和辻によれば、人は言葉や記号なしで問いをもつことができないが、それは、人の意識が個人的意識であると同時に社会的意識であるためである（和辻 (1937)、p.50.）。そうした和辻の思想は、以下のような和辻の「人間」概念によく表れている。「人間とは『世の中』自身であるとともにまた世の中における『人』である。従って『人間』は単なる人でもなければまた単なる社会でもない。『人間』においてはこの両者は弁証法的に統一せられている。」（和辻 (1934)、p.28.）
- (26) 馬場 (2022)、p.15.
- (27) 岩内・小川 (2022)、p.58.
- (28) 岩内・小川 (2022)、p.58.
- (29) 岩内・小川 (2022)、p.76、強調は原文通り。
- (30) 岩内・小川 (2022)、p.60.
- (31) 岩内・小川 (2022)、p.72.
- (32) 村瀬・土屋 (2018)、pp.95-96.
- (33) また、本論文では「哲学対話」に関する知見の獲得という観点から、従来の議論については国内の議論に絞って参照したが、今後の「問い」そのものに関する研究においては、国外における「問い」や対話的な哲学実践に関する議論も参照する必要があるだろう。

【参考文献】

- Martin Heidegger (1927) , Sein und Zeit. = マルティン・ハイデッガー (1994) 『存在と時間』細谷貞雄訳、ちくま学芸文庫.
- 岩内章太郎・小川泰治 (2022) 「哲学対話に『答え』はないのか——子どもの哲学と現象学的哲学対話の観点から」『現代生命哲学研究』第 11 号、pp.57-81.
- 梶谷真司 (2023) 『問うとはどういうことか——人間的に生きるための思考のレッスン』大

和書房.

河野哲也（2019）『人は語り続けるとき、考えていない——対話と思考の哲学』岩波書店.

榊原哲也・本郷均（2023）『現代に生きる現象学——意味・身体・ケア』放送大学教育振興会.

寺田俊郎（2020）「哲学対話の定義、歴史、関連分野」『ゼロからはじめる哲学対話——哲学プラクティス・ハンドブック』河野哲也編、ひつじ書房、pp.2-16.

馬場智一（2022）「哲学対話における『問い』の難しさについて」『思考と対話』第 4 巻、pp.12-22.

松岡廣路（2006）「福祉教育・ボランティア学習の新機軸——当事者性・エンパワメント」『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報』第 11 巻、pp.12-32

椋木香子・柏葉武秀・有吉美春（2021）「中学校道徳科における『哲学対話』の実践と生徒の哲学的思考の検討」『宮崎大学教育学部附属協働開発センター研究紀要』第 29 号、pp.17-30.

村瀬智之・土屋陽介（2018）「『子どもの哲学』が問いかけるもの——その教育理論と哲学的問題」『哲学』第 69 号、pp.90-100.

和辻哲郎（1934）『人間の学としての倫理学』岩波文庫、2007 年.

和辻哲郎（1937）『倫理学（一）』岩波文庫、2007 年.